

青年よ生活者となれ

真如

甲「真如とは何のことか。」

乙「真如とは、天地森羅万象の能産者である。」

甲「仏教では天地万有の親を立てるのか。」

乙「そうだ。法性法身仏と言って、色もなく香もなく形もなく、東西南北でもなく、過去、未来、現在でもなく、あらゆる一切を越えた絶対が真如である。その真如以外には何もものもないのだ。」

甲「それではキリスト教の天地創造神と同じであるか。」

乙「それとは違う。釈尊は天地創造神を否定した。真如は外的に一切を支配するのではなくて、万有の内において、万有を生かしているのだ。すなわち親は子（森羅万象）の中に生きている。これを内在と言うのだ。」

甲「それでは、生命と言っているのか。」

乙「そうだ。大生命だ。大生命だといっても物質に対する精神と言ったようなものではなくて、物心の以前のもの、すなわち心色不二の根源である。この生命だけは、未来永劫、人間の眼にもふれねば、耳にも聞こえねば、思っても見られず、口にもかけられぬ、いわゆる言亡慮絶、一切を超越して、しかも一切に内在する絶対真理である。」

甲「なるほど。それならうなずかれる。だが、それだけわかったのでは、何だかもの足りない。」

乙「もちろんのことだ。そこで話を変えるが、われらはわれらの現実に戻ろう。現実の人生を凝視しよう。このままでいいか。」

甲「このままではいけない。」

乙「同じ親から生まれた子が、互いに戦いつつ傷つけつつ、『我』を出し合って、早い話が、家庭の中だつて、なかなか楽にはゆかない。何か問題をおこしつつ、いわゆる十悪五逆をくり返して、血みどろけの歩みをつづけている。」

甲「そうだ。家庭の問題だけでもうんざりするね。ぼくの家庭でも、まったく行きづまりだ。」

乙「草木や自然の風景などは、あのままで天地の相に生きているが、人間はそれではおさまらない。人間は犬猫よりも貪欲であるから、労資問題だとか、経済問題だとか、いろんな問題をおこすのだ。しょせんわれらの人生は生死の苦海だ。いわゆる生死界である。生まれては死に、死んでは生まれ、その間、道をも思わず、法をも考えず、善というも無明であり、互いに善悪を裁きつつ、苦しみつつ、苦しませつつ、まったく無価値なる争いに、しかも一寸の身動きすらできない行きづまりの中に、苦しみだけをどうにかしようと思っている。」

甲「まったくそのとおりだ。じつはぼくも、いろんな問題で行きづまっているのだ。」

乙「この生死海にいる者は、いかに迷いの流転でも、けっして迷いとは思わない。悪はいよいよ深くして独善人らしく、悪いよいよ甚しくついに愚を知らず、ただ自ら高く人を見下げて、自分一人の幸福を考えているもの、すなわち凡夫である。」

甲「ぼくがまず一番の凡夫だね。だが、ぼくの所の妻なども、ヒスをおこした時など、手がつけられないほどの悪人凡夫だね。しかもそうした時は癩にさわるほど高慢だ。」

乙「仏は一切の苦悩は煩惱より生まれると説く。すなわち、苦は、ものに執着し我に執着して所有しようとする愛欲煩惱より生まれるのだ。それらの生死煩惱のどん底には、無明とて、愚痴、疑惑、はからいのおおるべき『我』がひそんでいる。その根本無明を打ち破らなければ、明るく正しく生活することはできない。」

如来

甲「しからば何がその根本無明を打ち破るのか。」

乙「それは智慧である。」

甲「智慧？」

乙「そうだ、信心の智慧だ。聖人は智慧の念仏と言い、信心の智慧と言われた。」

甲「その智慧はどうして得られるのか。」

乙「それは如来を念ずることによつて得られる。」

甲「如来とは何のことだ。」

乙「真如より顕現して衆生の上に来生するもの、如より来生するから如来だ。」

甲「なるほど、それでは無明生死の苦海へ如より来生して衆生を救おうとするのだね。」

乙「そうだ。真如法性のままが生死苦悩の上に力となつて顕現するのだ。その力としての仏を阿弥陀仏と言うのだ。尽十方無碍光如来だ。無量寿如来だ。そして、この因果態として現われる仏の力を本願力と言うのだ。この本願力がわれらの現実に働きかけてきて、信心の智慧を発起せしめるのだ。」

甲「ちよつと待つてくれ。真如まではすぐわかつたし、生死海も肯けるが、その阿弥陀仏がわからない。」

乙「よし、わかるまで話そう。」